年間第２７主日　2014.10.5

「ぶどう園と農夫」のたとえ

マタイ福音書 21:33-43

（イエスは祭司長や民の長老たちに言われた）「もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がぶどう園を作り、垣を巡らし、その中に搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。さて、収穫の時が近づいたとき、収穫を受け取るために、僕たちを農夫たちのところへ送った。だが、農夫たちはこの僕たちを捕まえ、一人を袋だたきにし、一人を殺し、一人を石で打ち殺した。また、他の僕たちを前よりも多く送ったが、農夫たちは同じ目に遭わせた。そこで最後に、『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、主人は自分の息子を送った。農夫たちは、その息子を見て話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺して、彼の相続財産を我々のものにしよう。』そして、息子を捕まえ、ぶどう園の外にほうり出して殺してしまった。さて、ぶどう園の主人が帰って来たら、この農夫たちをどうするだろうか。」彼らは言った。「その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに貸すにちがいない。」イエスは言われた。「聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか。

『家を建てる者の捨てた石、
これが隅の親石となった。
これは、主がなさったことで、
わたしたちの目には不思議に見える。』

だから、言っておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。」

きょうのテキストもぶどう園がでてくるたとえ話です。前回、前々回（マタイ 20 章 1 節から、マタイ 21 章 28 節から）に引き続いてのぶどう園を舞台

にしたたとえ話になっています。ところで、聖書ではぶどう園とはどんな意味をもっているのでしょう。イエスが語られるぶどう園の比喩はとはどんなイメージで当時のエルサレムの人たちは受け止めたのでしょうか。
わたしはぶどう園と聞くと山梨にあるぶどう園をイメージします。そしてぶどうをデラウェア、巨峰などの果物としてイメージします。ぶどうは食用と酒造用の二種類に大別されそれぞれテーブルグレープ、ワイングレープと呼ばれているそうです。聖書の記述からするとイエスの語るぶどう園ではワイングレープを栽培しています。わたしたちは礼拝で主からの恵みとしてパンとワインをいただきます。そのワインはどこから来たものか、福音に聞きましょう。
先々週の 20 章のぶどう園の話では働く人について語られていました。夕方から働いた人にも朝から働いた人と同じ報酬を支払うという話でした。先週の 21 章は兄と弟の話で彼らがそれぞれぶどう園に行く、行かない、父の命令に従ったかか従わなかったか、拒否したものの考え直して言いつけに従った、口ではハイといいながら実際は行かなった、という話でした。きょうのテキストは先週の直後に語られるたとえで「ある家の主人がぶどう園を作り･･･」と始まります。先週、先々週のたとえとは様相が異なり、物騒なコロシのはなしとなります。主人のぶどう畑で働く農民たちがいます、主人が収穫を受け取ろうと僕を送ると農夫たちはその僕を殺してしまう。日本流にいえば百姓一揆です。そしてついには主人の息子までも殺してしまう。
そして、息子を捕まえ、ぶどう園の外にほうり出して殺してしまった。21:39
ここの「ぶどう園の外」とはイエスがエルサレムの城外で十字架刑にあったことを比喩していると解釈されています。

日本流に百姓一揆をとらえると悪いのは代官や役人でさんざん耐えに耐えた農民がほう起してお上に逆らう、一揆自体は悪いことなんだけど、そうさせ

るようにしたのは悪い政治であり悪いのは支配者たちだ、という風になります。判官びいき（注1）という感情ですね。

イエスはこのたとえを「祭司長や民の長老たち」に語っています。たとえ話を聞き終えた彼らはイエスの問いかけにこう答えます。

彼らは言った。「その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに貸すにちがいない」21:41

「祭司長や民の長老たち」は先週のたとえでいえば、口ではハイといっていながら行かなかった弟に当たります。農夫たちが主人の実の息子を殺したように、彼らも神の子イエスをゴルゴダの丘で処刑した者たちだからです。

判官びいきとは違うのですが、このたとえをイエスの限界と解釈する見方があります。虐げられている農民たちの痛みに心寄せることなく（20章の主人とはずいぶんと違っています）、イエスは農民たちを主人の子を殺す暴徒と捉えているという見方です。実際に不在地主といわれている貴族、金持ちのローマ人たちはユダヤの農民から搾り取っていたようです、またしばしば一揆もおきたという歴史はありました。おそらく同じユダヤ人の中にも搾り取る立場の人たちはいたでしょう。

しかし、これも皮相な見方のように思えます。わたしたちは自分たちが努力することで得たものや得たことは、自分たちの手柄だと思い込みます。汗水たらして働いた成果を誇りたくなります。農民たちもそうだったのでしょう。種まき、耕し、雑草をとり、収穫したのは自分たちだ、それを収穫時期にだけやってきて主人のものだからぶどうを差し出せという、黙って差し出すか、差し出したくないでしょう。自分のものだといいたくなります。

「福音のヒント」にはこう結ばれています。

わたしたちが「神から貸し与えられたもの」「管理をゆだねられたもの」とは何でしょうか。地球の資源や環境？　自分のお金や持ち物？ 力や才能？ 地位や立場、さまざまな特権？ それらは皆、神がわたしたちにゆだねたものなのではないでしょうか。それをわた

したち人間は、いつの間にか、自分勝手に使ってよいものと思い込んでしまっていることがあるのではないでしょうか。

一対一の人間関係において社会の中での人との関係（男と女の関係、学校での会社での関係）などの人間関係とヒトと自然などの関係をいっしょに考えるのはなかなか難しいのですが「最初にことばありき」という聖書の原則で考えるならば人間関係だろうが、自然と人間であろうが、シンプルにそして謙虚になれるのではないでしょうか。

注１：判官贔屓（ほうがんびいき）とは、第一義には人々が源義経に対して抱く、客観的な視点を欠いた同情や哀惜の心情のことであり、さらには「弱い立場に置かれている者に対しては、敢えて冷静に理非曲直を正そうとしないで、同情を寄せてしまう」心理現象を指す。「判官」の読みは通常「はんがん」だが、『義経』の伝説や歌舞伎などでは伝統的に「ほうがん」と読む。

ウィキペキアから引用